

E・M・フォースターの「副牧師の友達」の一考察

著者	石和田 昌利
雑誌名	白山英米文学
号	36
ページ	29-46
発行年	2011
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00000120/

E・M・フォースターの「副牧師の友達」の一考察

石和田 昌 利

「副牧師の友達」はE・M・フォースターが一九〇七年に『パルマル・マガジン』と『パトナムズ・マンズリー』に同じ十月に発表した短編小説である。人間に影響を与える「土地の霊」や対立する価値観の衝突という主題をフォースターのすべての作品を貫く主題として考える場合、この作品はフォースターのこれらの主題がフォースターの他の作品とは異なる形式で表現されている作品である。この作品は『天使も踏むを恐れるところ』、『最も長い旅』、『眺めのいい部屋』、『ハワード・エンド』、『インドへの道』、『モリス』というフォースターの六作の長編小説や、『パニックの話』、『コロノスからの道』、『永遠の瞬間』、『アザー・キングダム』、『セイレー

ンの話』、『アルベルゴ・エンペドクレ』などのフォースターの主要な短編小説で繰り返し使用される技法が変形されて使用されている作品である。「副牧師の友達」は、『天使も踏むを恐れるところ』、『眺めのいい部屋』、『インドへの道』のように、イギリス人の来訪者が、旅行で訪れた場所の異文化に出会い、対立する価値観との衝突を経験する形式を取らない。「副牧師の友達」は、イギリス人が、イギリスへの異文化の侵入あるいはイギリスに潜む異文化の出現に出会い、異文化がイギリス人に影響を与えるという形式を取る。しかし、この作品も、『パニックの話』、『コロノスからの道』、『セイレーンの話』、『アルベルゴ・エンペドクレ』のように、登場人

物が異文化との出会いによって心の中に眠っていた本性を目覚めさせ、登場人物が異文化によって救済されるという側面を持つ作品でもある。この作品においては、ファウヌスとい

1

うローマ神話の牧神とイギリス人の牧師という職業の登場人物に与えられた設定が特に異彩を放つが、フォースターが作品に特徴を与えるために頻繁に使用してきた作品の要素である構成、舞台、ナレーション、プロット、特に、結末にも他のフォースターの作品とは異なる独自性が感じられる作品である。この作品は、このような理由から、おもしろい急展開を持つ作品として注目されたり、最悪の失敗作として酷評されたり、時には、評価の対象にされずに無視されたりしている作品である。この作品についての評価は分かれているが、

登場人物に与えられた設定と出来事の幻想的な展開と結末にこの作品の特徴があることだけは確かである。小論は、この作品に埋め込まれているこの作品の特徴を考慮しながら、二つの対立する価値観の衝突が人間に与える影響を中心に、この作品における人間と場所の関係を考えていきたい。

この作品の構成、舞台、ナレーションに触れながら、この作品に設定された登場人物の特性を分析することから始めることにしよう。この作品はファウヌスがどうしてイギリスにいるのが「私」と表現されるこの作品の語り手の副牧師ハリーによって推測されるところから始まる。最初に、ファウヌスというローマ神話の牧神から考察してみよう。次のように、ハリーはファウヌスのイギリスへの侵入を推測する。

ファウヌスがどうしてウィルトシャーにいるようになったのかはわからない。ファウヌスは、ひょっとすると、ローマの兵士と共にやってきて、友達になった兵士といつしよに野営地で暮らし、ルクレティウスやガルガスやエトナの丘について兵士に話していたのかもしれない。兵士は、ローマ本国への召還を喜んで、ファウヌスを船に乗せるの

を忘れた。だから、ファウヌスは取り残されて涙を流した。しかし、ファウヌスは、私たちの丘もファウヌスの悲しみを理解し、ファウヌスが幸福になると、私たちの丘も喜ぶことがわかった。あるいは、ファウヌスは、ひよつとすると、いつもこの場所にいたので、この場所にいることになったのかもしれない。ファウヌスは特に古典的な存在ではない。ギリシア人とイタリア人がこれまで最も鋭い眼を持っていたのに過ぎない。⁽³⁾ (六八)

フォースターは、史実と虚構を組み合わせ、この作品に幻想性を与えている。ローマ皇帝クロディウスが、一世紀に四万人以上の部下を率いてグレート・ブリテン島に上陸し、ケルト民族が支配していたグレート・ブリテン島を制圧し、ローマ帝国の支配を確立したのは史実である。ギリシア文化を吸収したローマ帝国がギリシア神話と重ね合わせられるローマ神話の信仰を持っていたことは周知のことであろう。従って、ローマの兵士と共にやってきたものは、ギリシア神話

のパンやサテュロスではなく、ローマ神話のファウヌスでなければならぬ。ファウヌスは、ギリシア神話の牧神のパンと同一視され、ローマ人のパンとも考えられてきたローマ神話の神である。⁽⁴⁾ ファウヌスは、人間の上半身と山羊の下半身と角を持ち、森と牧畜の神であり、パンの属性が移入されていると言っても良い。従って、ギリシア神話の神々とローマ神話の神々は社会の中で同様の機能を果たしてきたのである。すなわち、ギリシア神話の神々もローマ神話の神々も、自然の力の具象化であり、信仰の対象であつた眼に見えない不滅の存在に過ぎない。人間の鋭い感受性は、ギリシア人やローマ人ではなくても、自然の力の中に神の姿を見せてくれることがハリーのナレーションに強調されている。そして、フォースターは、ファウヌスのグレート・ブリテン島への侵入を事実としてハリーに断言させず、ファウヌスがグレート・ブリテン島に潜んでいた存在であるという可能性もハリーに語らせている。フォースターは、S・K・ランドも指摘しているように、『最も長い旅』のリッキー・エリオットはファ

ウヌスがケンブリッジの郊外に住んでいると信じている個人的な夢想を「副牧師の友達」に利用しているのに過ぎない。更に、ランドは、ローマ人の土塁と思っていた作品の舞台となる場所がサクソン人の土塁であったとハリーに語らせる作品の舞台の説明や愛のない結婚を取りやめるプロットの展開にも『最も長い旅』との類似を指摘している。しかし、ローマ神話の牧神のファウヌスがイン格蘭ドの田園に宿っているという伝説はない。一方、ローマ人の兵士のイギリスでの駐屯は事実であり、四世紀のローマ人の兵士のグレート・ブリテン島からの撤退も事実である。移動してきたゲルマン民族のローマ帝国の領域への侵入が新しい世界を創り出していく。しかし、ローマ人が撤退しても、失地を回復したケルト民族のドルイド教がグレート・ブリテン島を再び支配した訳ではなく、ゲルマン民族のアングル人、サクソン人、ジュート人がグレート・ブリテン島に侵入し、アウグステイヌスがグレート・ブリテン島のゲルマン民族にキリスト教を伝播し、グレート・ブリテン島はローマ人が上陸する以前とは異なる

世界に変貌してしまったのは周知の史実である。このように考えると、ローマの多神教のほうがイギリスの先住者であり、キリスト教のほうが侵入者ということになる。フォースターは、ファウヌスをキリスト教世界に取り残されたローマからの侵入者であるという可能性とファウヌスはローマ人が侵入する以前からグレート・ブリテン島に宿る存在であるという可能性の両方を匂わせ、読者にこれらの個人的な考えを信じ込ませようとしている。しかし、ファウヌスは、グレート・ブリテン島固有の「土地の霊」ではなく、あくまでローマのラテン民族の「土地の霊」であり、実際はギリシア人の「土地の霊」に起源がある。フォースターは語り手のハリーにファウヌスをグレート・ブリテン島固有の「土地の霊」のように紹介させているが、これは読者がそのように考えるように仕向けている作者の作為に過ぎない。

この作品のこのような設定はこの作品の構成を予想させる。この作品は、「パニックの話」、「コロノスからの道」、「セイレーンの話」「アルベルゴ・エンペドクレ」のように、過

去のローマの異教世界と現在のイギリスのキリスト教世界が対置されている幻想的な作品である。ファウヌスという神が向き合う相手はキリスト教の副牧師のハリーという人間である。そして、過去のローマの異教世界の価値観が現在のイギリスのキリスト教世界に侵入して人間に影響を与える作品と考えることができよう。「私はどうしてファウヌスが見えるようになったかは何よりも難しい問題である」(六八)というハリーが自分の直面している問題を指摘するナレーションは「副牧師の友達」の問題を讀者に示している。ハリーにだけファウヌスが見えるのである。この作品の登場人物は、ファウヌスとハリーを除くと、ハリーが婚約しているエミリー、エミリーの母親、エミリーが恋している若い友達の名のみである。そして、ハリー以外の登場人物にはファウヌスは見えない。このように考えると、この作品は幻想に取りつかれたハリーの自問自答としても読むこともできる。この作品のすべてがハリーのナレーションだということを忘れてはならない。ファウヌスが副牧師のハリーの友達と言われている理

由はハリーにだけファウヌスが見えることにあると言えよう。ローマの兵士も、友達と呼んでもらえるのは、ファウヌスの姿が見えたことを予想させる。しかし、この作品は友達の意味を曖昧にしたまま進行していく。しかも、作品の舞台はウルトシャーの海に突き出した岬にあるサクソン人の土星の跡での屋外でのティー・タイムの場面のみである。この作品にはファウヌスという異文化が描かれているが、描かれていることが、特定の場所への異文化の侵入なのか、あるいは、特定の場所に潜む異文化の出現なのかは、作品の最後まで不明である。ファウヌスがグレート・ブリテン島への来訪者なのか、あるいは、ファウヌスがグレート・ブリテン島の居住者なのかを決定することはできない。

次に、牧師と言うハリーの職業と副牧師というハリーの役職について考察してみよう。フォースターは、ライオネル・トリリングが指摘しているように、キリスト教の聖職者を愚昧で悪意に満ちた登場人物として辛辣に描く傾向がある。もちろん、フォースターの作品に登場するすべてのキリスト教

の聖職者が愚昧で悪意に満ちた登場人物として描かれている訳ではない。いくつかの例を見てみよう。『天使も踏むを恐れるところ』において、ソーストンの顎がないように見えるくらい太ったイギリス国教会の副牧師は夫に死なれたリリア・ヘリトンに手が汗ばむほど思いを寄せている男として話題にされ、モンテリアーノのローマ・カトリックの聖デオダード教会の司祭は毫碌した老人としてジーノ・カレラとリリアの結婚式を執り行うだけであり、どちらも、嘲笑的に描かれているが、愚昧さや悪意を感じさせない。『最も長い旅』において、エミリー・フェイリングの家が所在するキャドフォードの教区牧師は穏やかに日曜日の説教をするだけである。『ハワーズ・エンド』の牧師は、パーシー・ケイヒルとイーヴィー・ウィルコックスの結婚式やヘンリー・ウィルコックスとマーガレット・シュレーゲルの結婚式を執り行うだけの脇役である。これらのキリスト教の聖職者は、名前も与えられていない登場人物であり、作品の展開には影響しても、何の個性も發揮しない。一方、強烈な個性を放っているキリ

スト教の聖職者の登場人物もいる。『眺めのいい部屋』のイギリスのサマー・ストリートのイギリス国教会の教区牧師アーサー・ビーブは、穏やかで寛大な姿勢を見せながらも、ルーシー・ハニーチャーチをヴィクトリア朝の価値観を厳守する「中世的な女」⁽⁷⁾の型に押し込めようとし、イタリアのフィレンツェのイギリス国教会の教区牧師カスバート・イーガーは、冷たく厳格な姿勢を露骨に見せ、ルーシーをヴィクトリア朝の価値観を厳守する「中世的な女」の型に押し込めようとする。『インドへの道』でチャンドラポアに派遣されたキリスト教の宣教師のグレイズフォードとソーリーは、神の恩恵による救済ですべてを包含しようと考えながらも、神の恩恵による救済の範囲の限界を白人だけにしか人間だけにするかすべての生物にするかの討論をし、バクテリアの救済まで話題にし、差別と排除の必要性を唱えるだけである。『モリス』のボレニアスはアレック・スカダーの同性愛を暗示する性的な背徳行為をやめさせるためにアレックを最後まで追跡し続ける教区牧師である。これらのキリスト教の聖職者

は、異なる外見や性格を与えられてはいるが、帰属する社会の既成の価値観を民衆に厳守させるという共通の義務感を持ち、時には滑稽に見えようとも、自分の義務を遂行するために最善を尽くしている。愚昧さが強調されているキリスト教の聖職者は「パニクの話」の療養中のイギリス国教会の元副牧師サンドバッチ氏であり、悪意が強調されているキリスト教の聖職者は「セイレーンの話」のボートマンの話の中にも登場する牧師である。サンドバッチ氏はハリーとあまりにも共通点の多い登場人物である。第一に、ハリーはファウヌスが見えるように、サンドバッチ氏も悪魔が見えるのである。そして、サンドバッチ氏は、そのために、イタリアのラヴェロで療養中にパンに取りつかれたユースタスの出来事を目撃し、混乱を深めるのである。第二に、ハリーとサンドバッチ氏に共通する副牧師という役職である。ハリーとサンドバッチ氏は何かが満たされずに正牧師に昇格できないのである。しかし、見方を変えると、ハリーとサンドバッチ氏は完全にキリスト教に染まり切っていないということにもなる。そし

て、ハリーとサンドバッチ氏は正牧師に昇格のために周囲からどのように見られるかという体裁に普通以上に気を遣っている。しかし、ハリーには野望はあっても悪意はない。「セイレーンの話」のボートマンの話の中に登場する悪意のある牧師が、ジュゼッペとマリアがアンチ・キリストを生むという妄想に捉われ、村人にマリアを崖から突き落として殺すように仕向ける悪意はハリーにはない。それでは、ハリーが、ファウヌスが見えるために、エミリーを若い友達に奪われ、皮肉にも立派な正牧師になっていくプロットの展開を次の章で見ていきたい。

2

「副牧師の友達」は「私たちはあの日の午後屋内に留まっていたならば、何も起こらなかっただろう。それはすべてエミリーの母親のせいだった。何故ならば、エミリーの母親は屋外でティー・タイムを取りたいと言い張ったからだった」

(八七) というハリーのナレーションによって展開し始める。

ハリーは、エミリー、エミリーの母親、若い友達と共に屋外でティー・タイムの準備をしている時に、様々な声が聞こえてくる。屋外でティー・タイムを取るピクニックに、恋人だけではなく、恋人の親族や友達を同伴するのは、エドワード朝のイギリスに一般的に見られた慣習⁽⁸⁾であったようである。これらの声こそこの場所の「土地の霊」の声と言っても良いだろう。次のように、ハリーは様々な声を聞いたことが語られる。

私は、火のついたマッチを草の上に落とし、再び小さな叫び声を聞いた。

「あれは何だろう」と私は訊いた。

「とても静かねと言っただけよ」とエミリーは言った。

「本当にとっても静かですね」と若い友達は繰り返して言った。

静かだつて。その場所は騒音に溢れていた。マッチが客

間で落とされても、これほどひどくはならなかっただろう。そして、最も煩い騒音はエミリーの近くから聞こえてきた。私は、盛大なパーティーに行き、来客の声は聞こえるが、来客の顔をまだ見られない音が反響するホールで取り次がれるのを待っている感覚をちょうど味わった。それは自意識過剰の人間にとってはいらいらする瞬間である。聞こえてくる声が自分にとっては知らない声ばかりであり、自分を招待してくれた主人にあつたことがないならば、尚更である。(七〇)

ハリーにだけは自分たちのティー・タイムの準備のために痛がっている「土地の霊」の声が聞こえるのである。しかし、エミリー、エミリーの母親、若い友達には何も聞こえず、その場所は静かな屋外の場所に過ぎない。しかし、ハリーには「土地の霊」の姿が見えるまで時間はかからない。「見慣れない指が私に押し寄せてくるまで、私は、なおも相手は教区民の一人だと思い、『離せ、しょうのない奴め、離せ』と大き

な声で言うのを止めなかった」(七二)と語られているように、ハリーは、押し寄せてくる見慣れない指を見て、声を出してしまふ。ハリーの言葉は、エミリーの母親には冗談による演技に見てもらえたが、発狂と思われてもやむを得ないものである。ハリーは、発言に留まらず、行動に移る。何故ならば、「私は、ここで、ファウヌスの尻尾を見つけ、取り乱した叫び声をあげ、背後のブナの林に逃げ込んだ」(七二)と語られるように、ハリーはファウヌスの尻尾を目撃するからである。エミリーの母親は、このように「行動するハリーを」「天才俳優」(七二)と言い、ハリーの悪ふざけに付き合う素振りをみせるのである。ハリーは、キリスト教の聖職者であり、異教の牧神のファウヌスの存在を認めるわけにはいかない職業である。そして、パンに代表される異教の牧神を悪魔と呼び続けてきたのはキリスト教の聖職者である。「私はすでに森の中でたくさんさんの声、つまり、私の足の下の方の丘の声、私の頭の上の木々の声、木の樹皮の中の虫の声にさえ悩まされていた」(七二)と語るハリーは、「パニックの話」のユースタ

スと同様に、自然の音が聞こえるのである。しかし、この作品では、ファウヌスはキリスト教の聖職者ハリーに話しかけ、ファウヌスとハリーは会話をする。次のように、ファウヌスとハリーの会話は紹介される。

「僕は怖がっていないよ」と私は言った。そして、私は実際に怖がっていないかった。「でも、僕は悲しいんだ。僕は女性の前で恥をかかされたんだ」

「他の誰にも私の姿は見えていませんよ」とファウヌスは、何気なく微笑みながら、言った。「あれらの女性たちはぴっちりとしたブーツを穿いていて、あの男性は長い髪をしています。あれらの類の人々には決して見えないのです。私は、何年もの間、子供たちだけに話しかけてきましたが、子供たちは、大人になるとすぐに、私が見えなくなるのです。でも、あなたには私が見えなくなることはありません。そして、あなたは、死ぬまで、私の友達です。さあ、私はあなたを幸福にすることを始めます。仰向けに寝

転んで下さい。駆けっこをしてください。木を登ってください。それとも、私があなたにブラックベリー、イトシジャン、あるいは、妻を手に入れてきましようか。…」(七一)

この場面で「副牧師の友達」という作品は幻想性を意識せずに読めなくなる。小説が幻想性を持つことは珍しいことではない。ハリーの耳にだけ聞こえる「土地の霊」の声ならば、ハリーの錯覚による幻聴と考えられ、ハリーの眼にだけ見えるファウヌスの姿ならば、ハリーの錯覚による幻視と考えられる。しかし、ローマ神話の牧神のファウヌスと人間の牧師ハリーの会話は、小説の写実性を失わせ、幻想的な作品は読者が超自然的なものを受け入れることを要求するというフォースターが『小説の諸相』の中で主張する意見⁽⁶⁾を読者に強要することになる。読者は決して起こるはずがないすべてのことを受け入れてもらわなければならないというフォースターが仮定する幻想的な作品を描く作家の読者への要求⁽¹⁰⁾にこの作品の読者は応じられるだろうか。フォースターが認めている

ように、読者は、小説に描かれている虚構の世界が、現実ではないことはわかつているが、自然であることを願っているはずであるという状況は明白である。フォースターは、幻想的な要素を導入した作品においては、写実性を失わず、不自然さを解消するために、「パニックの話」、「アザー・キングダム」、「セイレーンの話」、「アルベルゴ・エンペドクレ」などでは語り手やナレーションを工夫しているが、「副牧師の友達」では「クロマー」(七〇)や「ドーヴァー」(七〇)というイギリスの実際の地名を使用しているだけである。従って、ファウヌスとハリーがどうしてコミュニケーションをとれるのかという疑問はファウヌスの言葉によつては解決されないばかりか、ファウヌスがハリーの願いを実現してしまうという幻想的な出来事も読者に驚きをもたさないうだろう。ファウヌスがハリーのために手にいれることを約束するものにフルーツや花と共に妻が並べられていることはフェミニストからの批判を免れない点であるが、ハリーがファウヌスに手に入れてくれるように願うものは妻である。「ファウヌス

には僕を手伝ってもらうよ。ファウヌスには僕が他人を幸福にするのを手伝ってもらうよ」(七二)というハリーの体裁を繕うような婉曲な言葉とエミリーを指さすハリーのはつきりした行動はファウヌスがハリーとエミリーの恋愛と結婚をもたしらしてくれるとハリーには思えていたのであろう。しかし、エミリーの肉体の欲求を解放するファウヌスの力はエミリーと若い友達にハリーの予想外の行動をさせる。次のように、エミリーと若い友達が肉体の欲求を解放する場面が語られる。

それから、ファウヌスは手をエミリーと若い友達の上に置いた。エミリーと若い友達は、ちよつとばかり上品な恋の戯れをするつもりしかなかったので、できる限り長くファウヌスの力に抵抗したが、徐々に互いの腕の中へ引き付けられ、熱烈に抱き合つた。

「悪い奴だ」と私は、森から急に飛び出して、大きな声で言った。「僕を裏切つたな」(七二)

ハリーはこの罵倒の言葉をファウヌスに対して言つたつもりである。しかし、ファウヌスの姿が見えないエミリーと若い友達はハリーの罵倒の言葉は自分たちに浴びせられたと誤解する。「窘めても無駄さ」(七三)というハリーを軽蔑する若い友達の言葉や若い友達に続いて「ハリー、ハリーじゃ私を幸福にできなかったわ」(七三)というハリーに憤怒を示すエミリーの言葉は、ハリーとエミリーの恋愛の終わりばかりではなく、ハリーと若い友達の友情の終わりの意味していると言えよう。ファウヌスによるエミリーと若い友達の肉体の欲求の解放ばかりではなく、ハリーの罵倒の言葉の誤解が、ハリー、エミリー、若い友達に潜在していた三角關係を明白にし、ハリーの失恋やエミリーと若い友達の恋愛の成就という大きなプロットの展開を生み出して行く。エミリーの眼には見えないファウヌスに対するハリーの行動はエミリーには許せない悪ふざけだったのである。ハリーを棄てたエミリーと若い友達に対する「一組の無力な操り人形」(七三)というハリーの言葉は、エミリーと若い友達への感情的な非難ば

かりではなく、ファウヌスの操り人形になっていることへの哀れみが込められている。エミリーと若い友達にはファウヌスの操り人形になっているという自覚はない。ファウヌスが、エミリーと若い友達がファウヌスとハリーを残して去った後で、ハリーに「ああ、これで、あなたは私たちの本当の友達になりましたね。生涯、不機嫌な時には罵り、幸福な時には笑うでしょう。さあ、笑いなさい」（七三）と述べる言葉はこの作品が表面的な上品さを重視する体裁主義の諷刺を意図していたことを感じさせてくれる。一方、ハリーは、もはやエミリーとの結婚に関心はなく、石灰質の丘が谷越しに互いに歌い掛け合った光景を目撃する喜びに心酔した経験を読者に伝える。そして、「何年もその後には幸福な日々が続いたにもかかわらず、あの最初の夜の喜びは私の記憶の中では今でも鮮明である」（七四）というハリーのナレーションはハリーがエミリーとの結婚よりも大きな喜びを自然とのコミュニケーションから得られたことを読者に知らせている。ハリーは自然と人間が分離した時代である秩序づけられた光の世界

から自然と人間が融合した時代である混沌とした闇の世界へ回帰することができた喜びに浸ることができたのである。この作品は、「土地の霊」と出会え、自然とコミュニケーションを取れた人間の喜びを描いているのである。「私は、自分の書斎から、人間が自分の家の前に座っているように、ファウヌスの日差しを浴びた姿がブナの林の前に座っているのを見ることができた」（七四）と語られているように、ハリーがその時にファウヌスを目撃するのはファウヌスが宿る世界は自然と人間が融合した時代である混沌とした闇の世界であることを証明し、ハリーも、自然と人間が分離した時代である秩序づけられた光の世界を守るキリスト教の聖職者でありながらも、自然と人間が融合した時代である混沌とした闇の世界にファウヌスと共に帰属していることを仄めかしていると言えよう。ハリーは異教の牧神のファウヌスによって心が救済されたと言っても良いだろう。ファウヌスはハリーの願いを誤解してはいなかったのである。対立する価値観の衝突による救済がフォースターの作品の中に埋め込まれていること

は珍しいことではない。

しかし、ハリーの失恋を生み出す若い友達とエミリーの恋愛の成就是この作品に潜む同性愛の問題を感じさせる。ハリーが、エミリーに棄てられながらも、失恋による落胆をまったく見せず、自然とコミュニケーションを取れた喜びに心酔している展開に不自然さを感じる読者は少なくないであろう。ハリーは、エミリーの裏切りを喜んでいとは思えないが、エミリーの裏切りへの強い関心を感じさせない。同性愛が内面の自由と平安をもたらしてくれるファウヌスとのハリーの出会いに潜在している疑いは、この疑いを最初に指摘したアラン・ワイルド以来、絶えることなく指摘されてきた問題である。友達という言葉が同性愛の対象を示していることは明白であろう。ファウヌスという牧神が信仰されていたローマという古代世界は同性愛が容認されていた世界であることは言うまでもない。フォースターは「私に影響を与えた本」というエッセイで自分のことを述べる時には幻想性を用いると宣言¹⁴していることを根拠にフォースターがもう一人の

自分と会話している作品としてこの作品を捉えている解釈もある。ファウヌスをこの作品が出版された当時に流行した反文明社会の象徴¹⁵ではなく、ファウヌスをローマという古代世界の同性愛に結び付けると、ハリーとファウヌスの会話は社会には同性愛者ではないふりをしている仮面を被ったフォースターと実際には同性愛者である仮面を脱いだフォースターの会話ということになる。確かに、帰属する社会の社会通念の枠組みの外部に歓喜を発見する登場人物を扱う「副牧師の友達」は擬装された同性愛小説であるという可能性を棄て去ることはできない。

この作品の結末はフォースターの他の作品に扱われていないキリスト教の聖職者の姿を読者に語る。ハリーは、キリスト教の聖職者として見えてはならない異教の牧神のファウヌスの姿が見えているにもかかわらず、キリスト教の聖職者として苦悩しない。ハリーには「パニックの話」の悪魔が見えたサンドバッチ氏のような苦悩がない。それどころか、ハリーは、異教の牧神のファウヌスが見えても、キリスト教の聖

職者をためらいもなく続け、正牧師に昇格し、キリスト教の聖職者として出世し、キリスト教の聖職者の地位を守ろうとする。ハリーが異教の牧神のファウヌスと出会うことによつて社会的に成功するという結末は、すでに注目されてきたことではあるが、フォースターの他の作品には見られない展開でもない。経済的な裕福さが高められた精神性の支え⁽¹⁸⁾になる

と考へてきたフォースターは、『眺めのいい部屋』のジョージ・エマソンとルーシーのように結婚によつて裕福さを弱める結末にするカッブルもいれば、『ハワーズ・エンド』のヘンリーとマーガレットのように結婚によつて裕福さを失わない結末にするカッブルもいる。従つて、「副牧師の友達」の結末をフォースターが小説に設定した例外的な展開と考へたり、ハリーをフォースターが小説に設定した例外的な登場人物として考へたりする必要はない。しかし、この作品の終結部でキリスト教の聖職者として活躍するハリーの姿は、ハリーの魂が救済され、ハリーが私欲のためだけに生きているのではないことも語られる。ハリーは、地位や収入を失わないよう

にしているが、ファウヌスと出会い、自然とコミュニケーションを取れた喜びを伝えたいという気持ちを持つていないわけではない。次のように、この作品は正牧師に昇格したハリーがファウヌスとの出会いを擬装した短編小説にしているというナレーションで結ばれる。

そして、私は、良いと思われるものを伝えようとするのと同様に、あの喜びを他の人々に伝えようとし、時々は成功するけれども、あの喜びがどのように私に訪れたかを正確に誰かに話すことはできない。何故ならば、私があのことを一言でも言葉に出すならば、快適で利益をもたらす私の現在の生活は終わりになり、私の信徒は去り、私は、私の教区の宝ではなく、国家にとつての厄介者になつていくかもしれない。だから、私は、この話題にとつても相應しく、私の職業にまさにぴったりしている、美しい表現で誇張の多い論述の方法ではなく、物語というつまらない手段を用い、これは列車の中で読むのに相應しい短編小説であると

明言して皆さんを騙さざるを得なかった。(七四)

「副牧師の友達」の終結部の重層性を持つハリーのナレーションは、この作品が、キリスト教の聖職者の地位と収入を失わないようにするハリーによって擬装されているが、真実の告白でもあることを読者に仄めかしているのである。すでに指摘されているハリーのナレーションの重層性⁽¹⁹⁾は否定できない。しかし、ハリーが更に異なる真実を隠していることも疑われないだろうか。ハリーはファウヌスによって同性愛を暗示しているという可能性はないだろうか。ハリーがファウヌスによって同性愛を暗示していることに、可能性はあるもの、断言できる決定力はない。ハリーが隠そうとしているものがファウヌスとハリーの同性愛であったとしても、疑問は残る。同性愛は地域や宗教にかかわらず、もはや珍しい人間の性質ではなく、人間の性質の一種として認められるようになってきている。フォースターの幻想性による同性愛のカモフラージュという問題は、先行研究やポストコロニアル批

評や多文化主義批評の流行にも影響されて、関心が薄れている。しかし、同性愛が犯罪として扱われる地域と時代に暮らしていたフォースターは、同性愛者であることの発覚を恐れていたにもかかわらず、どうして同性愛を暗示しているような疑いを持たれる作品を公表したのかという疑問はある。C・J・サマーズは、ハリーばかりではなく、フォースターも、幸福の根源が同性愛であることを明かしたならば、社会から求められる代償に気付いていたことを指摘⁽²⁰⁾している。同性愛を想起させる可能性がある「アルベルゴ・エンペドクレ」がフォースターの在命中に出版されることを望まなかったフォースターがどうして同性愛を想起させる可能性がある「副牧師の友達」を短編集に所収して出版したのかは今なお解明されない謎である。

3

このように、この作品を人間と場所の関係から見ると、

次のようなことが言える。人間に影響を与えるものについては、この作品も、登場人物の一人が、人間に影響を与えるものに出会い、対立する価値観の衝突を経験し、心の中に眠っていた本性を目覚めさせるというプロットを持つ作品である。しかし、この作品は、人間が影響力を人間に与える存在が宿る場所を訪れるのではなく、影響力を人間に与える存在が人間を訪れるのである。人間は、この作品においては、自発的に行動する者ではなく、受動的に行動を受ける者に過ぎない。対立する価値観の衝突については、異文化の侵入による環境の変化と環境の中に潜在する異文化の問題が描かれている。異文化を受け入れた人間は、帰属していたキリスト教世界では孤立することになるが、異教世界に友達を持つことになる。異教世界とキリスト教世界の出会いと受容が本来は異教世界を拒絶すべきキリスト教の聖職者によって可能にされるのである。この作品は、帰属していたキリスト教世界での孤立は描かれず、出会った異教世界との歓喜のみが強調される。この作品は、法律的に禁止されている異文化の受容の

発覚への恐怖ではなく、異文化を寛大に受け入れられる世界の形成に対する夢を表現していたとも捉えられる。この作品を幻想性のカモフラージュ機能に対する注目から最も重要な作品と主張する先行研究⁽²⁾に同調する訳ではないが、この作品は軽視しても良い作品ではない。しかし、フォースターは自分が同性愛者であることをカモフラージュするためだけに幻想性を使用して作品を創作しているのではないことも明白であろう。幻想性は、人間に影響を与える「土地の霊」を具現化し、実際には不可能な時間と空間の隔たりのある対立する価値観の衝突を可能にしてくれる。

〔注〕

- (1) J. S. Martin, *E. M. Forster: The Endless Journey* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1976), p.56.
- (2) G. H. Thomson, *The Fiction of E. M. Forster* (Detroit: Wayne State Univ. Press, 1967), p.59.
- (3) E. M. Forster, "The Curate's Friend" in *The Machine Stops and*

- Other Stories*, Abinger Edition 7 (London: Andre Deutsch, 1997) 以下、テキストからの引用は引用文の末尾にページ数を示す。
- (4) Robert Graves, *The Greek Myths* (1962; rpt. Harmondsworth: Penguin Books, 1983), I, p.193.
- (5) S. K. Land, *Challenge and Conventionality in the Fiction of E. M. Forster* (New York: AMS Press, 1990), p.107.
- (6) Lionel Trilling, *E. M. Forster* (London: The Hogarth Press, 1962), p.46.
- (7) 拙論「E・M・フォースターの『眺めのいい部屋』の一考察」『白山英米文学』第二四号（一九九九年）, pp.17-18.
- (8) Laurence Brander, *E. M. Forster: A Critical Study* (1968; rpt. London: Rupert Hart-Davis, 1970), pp.208-209.
- (9) E. M. Forster, *Aspects of the Novel*, Abinger Edition 12 (London: Edward Arnold, 1974), p.77.
- (10) Ibid., pp.75.
- (11) Ibid.
- (12) Alan Wilde, *Art and Order: A Study of E. M. Forster* (New York: New York Univ. Press, 1964), p.75. Wilfred Stone, *The Cave and the Mountain: A Study of E. M. Forster* (Stanford: Stanford Univ. Press, 1966), p.157. Barbara Rosecrance, *Forster's Narrative Vision* (Ithaca: Cornell Univ. Press, 1982) p.177. C. J. Summers, *E. M. Forster* (New York: Frederick Ungar, 1983), p.250. J. S. Hez, *The Short Narratives of E. M. Forster* (London: Macmillan, 1988), p.52. Arthur Marland, *E. M. Forster: Passion and Prose* (Swaffham: The Gay Men's Press, 1999), p.27.
- (13) 石塚裕子『ヴィクトリアンの地中海』（東京：開文社，二〇〇四年）, p.201.
- (14) E. M. Forster, "A Book That Influenced Me" in *Two Cheers for Democracy*, Abinger Edition 11 (London: Edward Arnold, 1972), p.215.
- (15) 増渕正史『フォースターの小説研究——「緑の蓑」——』（東京：八潮出版社，一九八六年）, p.132.
- (16) Francis King, *E. M. Forster and His World* (London: Thames and Hudson, 1978), p.33.

- (17) Wilde, p.73. Herz, p.50. Summers, p.251. Land, p.109.
- (18) Martin, p.57.
- (19) Herz, p.50.
- (20) Summers, p.252.
- (21) 韓德王政' p.149.